外傷性嵌入歯牙に起因したと思われる上顎洞炎の1例

九州歯科大学第2口腔外科学教室(指導:池尻 茂教授)

今里 洋一・原田 利夫・古本 克磨

A Case of Sinusitis Due to the Tooth Inlayed through External Injuries

Yohichi Imazato, Toshio Harada and Katsuma Komoto

Second Department of Oral Surgery (Director: Prof. Shigeru Ikejiri)

Kyushu Dental College, Kitakyushu, Japan

(本論文の要旨は第25回日本口腔外科学会九州地方部会において口演した。)

The patient, a man aged 47, sustained the injury of his upper jaw and lost the 5-1 teeth in a traffic accident three years ago. A year after the accident, the maxillary sinusitis occurred and persisted despite the conservative treatment by an otorhinolaryngologist for two years. Recently, the patient was referred to our department with a suspicion of a foreign body lying adjacent to the affected antrum. X-ray revealed the presence of tooth-like opaque adjoining the internal wall of the left antrum, so we operated to remove it under the local anesthesia on 20th May, 1974. The tooth-like body was found to be the left upper incisor that was inferred to have been inlayed in the accident. The tooth projected into the antrum, but the radical sinuotomy was not carried out for absence of remarkable inflammation on the antrum membrane. The post medication was indicated for a week, and any sign of sinusitis clearly disappeared.

This case points out that a thorough examination at first could have prevented the patient from unnecessary sufferings and that one should never take things for granted in treatment, even of an apparent routine case.

A はじめに

外傷性異物に起因する上顎洞炎は日常临床上、また文献報告においても少なくない。最近、外傷時の嵌入歯牙に起因したと思われる上顎洞炎の1例に遭遇し、顎顔面損傷に対する診察上、示唆される点を得たので報告する。

B 症 例

患者は42才、男性。当科受診(昭和49年4月24日)の約3年前に交通事故に会い、前歯部を打撲し、5-1の脱臼喪失を来し、直ちに、外科医による創傷処置を受けた。受傷1年後に、左側鼻汁・鼻閉と眼窩下部の腫脹、発赤、疼痛を認めたため耳鼻科を受診し、左側上顎洞炎の診断を受けた。その後2年間、種々の保存療法を続け、症状のわずかな緩解を得るも完治するに至らなかった。昭和49年4月、同耳鼻科医より、左側上顎洞付近の異物の存在を指摘され、当科を受診した。

当科受診時の所見として、左側眼窩下部の軽度のびま

ん性腫脹と発赤、ならびに圧痛を認めた。開口障害はなく、5-1の歯牙欠損を認めた、1相当部の齦唇移行部を触診すると、凹凸のある骨様硬様硬固物を触れ、その部の圧痛は著明であるが、当部の粘膜には発赤・腫脹はなく、波動等も触れ得なかった。

鼻閉感を訴える左側鼻腔内には黄白色の膿汁様鼻汁があり、鼻腔粘膜の発赤・腫脹を認め、特に下鼻道、中鼻道、および外側壁粘膜において著明であった。

また、朝、起立時に頭重感と共に悪臭のある鼻汁を認めると述べた。なお、患者は3年前の交通事故以前に副鼻腔炎、あるいは副鼻腔炎症状を示したことはないと言った。

C X線所見

1根尖相当部に歯冠部を上方に向けて翻転して位置している歯牙様不透過像が認められ、左側上顎洞に対しては、歯冠隅角部において鼻腔側洞底部と接し、洞との交通を疑わせた。歯牙様物の周囲は顎骨組織がとりかこ

Photo. 1 Occusal View
Shows the tooth-like opaque.

Photo. 2 Orthopantomogram
Shows the tooth-like opaque adjoining
the internal wall of left antrum.

み、歯根膜や歯嚢様の像は認められなかった。

左右上顎洞の透過性の違いは明らかではなく、また、これらの所見は歯科用フィルムでは不明で、後前法、ならびに Water 氏法で明らかであった（写真 1—3）。

D 処置ならびに経過

同年 5 月 20 日、局所麻酔下に歯牙の摘出を試みた。2 + 1 相当部の唇側歯槽粘膜に横切開を加え、粘膜骨膜弁を剝離した。1 根尖相当部のやや上方の上顎骨骨面上に癬痕様の軟組織に被包された歯牙の根尖部を認めた。歯牙は舌側面を前方に向け、翻転した位置で上顎洞の正中側底部において、歯冠部を洞内に突出させ、上顎洞と交通していた。洞粘膜は交通孔周囲に発赤を認めたが、著明な炎症所見もなく、膿汁も認められなかったの

Photo. 3 Water's View

で、根治手術を行なうことなく粘膜骨膜弁を閉鎖して手術を終了した。

摘出された歯牙は解剖学的形態より 1 と断定され、歯冠近心面にはタバコのヤニと思われる色素の沈着があり、舌側ならびに近心歯頸部には歯石の沈着が認められた。術後、1 週間の消炎療法を行ない、諸症状の完全消失を認め、8 カ月経過後の現在、再発その他の異常は認めていない。

E 考 察

外傷に際しては緊急迅速な処置を要求されることが多い。そのため、ややもすれば粗略な診察に処し易く、時に異物等を看過することがある。

創傷部の精査、入念な問診の肝要性については既に幾多の成書にも強調されている。顎顔面損傷に際しても、全く同様であるが、顎顔面には副鼻腔という「かくれが」(1969)¹⁾があり、さらに一層の注意が喚起される。

本症例は、2 年間の保存療法により、急性症状を来たすこともなく、また当科においても上顎洞根治手術を必要とはしなかった。しかしながら、嵌入歯牙に対する考慮が早期からなされていれば、2 年間という長い経過を要しなかったと考えられる。

F むすび

交通外傷時に歯牙が嵌入し、1 年後に発症した上顎洞炎の症例で、3 年後の嵌入歯牙摘出によって完治した 1 例を報告した。

文 献

1) 高橋良・他：鼻副鼻腔外傷，耳鼻咽喉科 41：771—778，1969。